

# 遠藤周作『おバカさん』論

－ 悪臭についての一考察 －

松橋幸代\*

(e-mail: aomori0427@hanmail.net)

---

## 目次

---

1. はじめに
  2. 四等船室から漂う便所の臭い
  3. 新宿駅裏の小便の臭い
  4. 山谷のドヤの便所の臭い
  5. おわりに
- 

## 1. はじめに

『おバカさん』は1959年3月26日から8月15日まで、朝日新聞夕刊に掲載された遠藤周作(以下、遠藤と称する)最初のユーモア小説である。遠藤はこの作品以降、中間小説<sup>1)</sup>、大衆小説と呼ばれる作品も多く執筆し、狐狸庵先生というもう一つのキャラクターで大衆の人気を博した作家でもある。にもかかわらず、これまでの遠藤文学の研究は純文学作品を中心に、彼の描く独自のキリスト像や母なる神、同伴者イエスをテーマに扱っているものが大部分であり、ユーモアや笑いの意義に着目したものはそれほど多くはない。

岡保生は「遠藤周作の純文学的作品と「軽い小説」的作品とは楯の両面をなしており、一方だけでわりきることはできない」<sup>2)</sup>と指摘している。また遠藤は、1965年「東京新

---

\* 忠南大学招聘教授。日本近代文学専攻

1) 中間小説に関しては諸説があるが、遠藤の中間小説の分類に関しては小嶋洋輔が『遠藤周作論―「救い」の位置―』に収載されている「中間小説論―書き分けを行う作家」の中で、遠藤が中間小説のジャンルをどのように自身の文学的テーマと結節させたか、換言すれば利用したかを探った論を展開している。

聞」掲載の「笑いの文学よ、起れ」の中で「今ではユーモア文学ということばがあり、まるでそれが特別な文学ジャンルのような考え方が一般になされている。だがユーモア文学などはない。あるのは文学だけ」であると述べている。さらに「文学における笑いが疎外された人間と人間、人間と外界との関係を再び回復するために使われないかということである」と、文学界におけるユーモアにおける位置や意義について思索している様子を窺うことができる。

遠藤自身、「ユーモア文学は人間や人生の真実をナックル・ボールで語ろうとする文学であり、その味わい方はそのナックル・ボールの面白さを鑑賞することにあります」<sup>3)</sup>と語っていることから、単純な笑いの娯楽文学と位置づけているのではないことは明確である。また、ユーモア小説を書く周期も「自分にある固定したイメージをつくられると息苦しい感じがしてならない。(中略)自分が軽薄な人間であるということを自分の読者にしらせようとする。周作が臭作(傍点論者)になりかわろうとするのはたいてい堅苦しい作品を書いたあとだ」<sup>4)</sup>とも述べている。

遠藤のユーモアの類に属されている作品や狐狸庵シリーズで取り上げられているモチーフには、共通した特徴をみつけることができる。それは、悪臭や糞尿に関する生理的現象に関するものが多いという点である。そこで本稿では、『おバカさん』に登場する多くの悪臭の場面のユーモア性とそこに潜む作家の意図について考察してみたい。

## 2. 四等船室から漂う便所の臭い

遠藤は1950年6月4日、終戦後まだGHQの占領下にあった日本からの最初のフランス留学生としてフランス船マルセイズ号でマルセイユに渡った。約1ヶ月の船旅であったが、遠藤はその時の様子を多くの作品やエッセイに登場させている。<sup>5)</sup>特に『赤ゲットの仏蘭西旅行』では、ユーモアあふれる文体で船旅の様子が詳細に記されている。遠藤はこの中で、自らの体験として船底の様子を次のように描写している。

皆さん、「奴隷船」という映画をみましたか。船の端の地下室の光も何もはいらねえ中

2) 遠藤周作(1975)『第二ユーモア小説』,講談社文庫.p.331

3) 遠藤周作(1964)7月7日『朝日新聞』掲載,「ユーモア文学のすすめ」

4) 遠藤周作(1972)『ぐうたら人間学』,講談社.p.46

5) 読売新聞の夕刊(1968年2月5日から13日に発表された「出世作のころ」や、『日本人を語る』(1974),小学館の中に収録されている加賀乙彦との対談「留学体験を通して」などに書かれている。

で、黒坊たちがかなしく歌を歌っている。実に、ぼく等の<sup>キャビン</sup>船室はあそこだったんです。成程、安い筈でしたよ。寝床には毛布も何もねえ、キャンプベッドがずらつと並んでいる。

(中略) それに何か知らぬが、物すごく臭い。船特有のペンキ油の臭気ではない。窒息しそうな臭いでしてね、何が原因か分からない。「臭いの」「臭いの」とわめいている内に、ぼく等四人の内、一人の奴が大変な事をきゝつけてきた。「おい、俺たち、黒坊と同居するんだぞ。」(中略) かの臭気は彼等の体臭によるものだったのです。6)

『おバカさん』には、遠藤が体験したフランス留学の船旅の光景と重なるような場面が多く登場する。例えば、マニラで見た真っ赤な夕焼けや、マニラ港に無数に沈む日本輸送船を見たこと、そして朝鮮戦争の勃発を知ったことなどは、ガストンが渡日の途中で目にした光景や状況として描かれている。これらの光景は、フランスに向かう船内で遠藤の心に深く刻まれたに違いない。

ガストンが乗ってきた船は「一万五千トン、真白なフランス船、ベトナム号」である。「天井にシャンデリヤがきらめいて」「豪華な壁絵に彩られた船内はまるでホテルのよう」であり、まさに夢のような豪華客船である。しかし、同じ船内でありながら、船底の四等は豪華な外見からは想像もできないトイレの悪臭がもれてくるような場所であった。そこは「なまあたたかい船の油とペンキの臭いにまじって家畜小屋のような動物的臭気がムツと鼻をつ」き、「この異様な臭いはW・Cからもれてくる」ものであった。これは、まさに前述した遠藤の実体験をもとにした描写であろう。

ナポレオンの末裔であるガストンではあったが、その身分にはふさわしくない船底の四等で船旅をしてきた。また、戦後最初の留学生としてフランスに向かった遠藤も、周囲からは羨望の眼差しで見られたかもしれないが、その旅路の苦労は想像を超えたものであった。遠藤が経験した豪華客船の船底での長旅の描写は、ガストンの船旅に重ね合わされている。

この場面で注目すべき点は、ガストンを出迎えに来た巴絵と隆盛兄妹の悪臭に対する対照的な態度である。巴絵は「思わずハンカチをそっと鼻にあて」「くさいわ、お兄さま……」と露骨に嫌悪感を感じているが、隆盛は「なんの臭いだろうなあ……」と巴絵ほど過敏に反応を示していない。むしろ「おれ、なんだか便所に行きたくなくてきて……。今にももりそうで……」と臭いに反射するように尿意をもよおしているところにおかしさがある。それだけでなく、こんな大事な時に「便所に行きたくなくてきた」と呑気にかまえている隆盛の態度に巴絵の呆れた顔まで目に浮かぶようである。このような兄妹の関係は物語の随所に登場するが、この二人の態度の違いはガストンに対する態度の違いとしても表現されている。

このような隆盛の態度を見た巴絵は「ああ一世の男性ってみんなお兄さまみたいなグウタラなのかしら。あたし結婚なんか絶対にしないわ」と軽蔑の態度を露にする。一方、隆盛は

6) 遠藤周作(1980)『こっすり、遠藤周作。』「面白半分」1月臨時増刊号, p.145

平生から巴絵に頭が上がらない、金銭的にも巴絵に頼る情けない兄である。ごく平凡なサラリーマンであり、幼稚な部分がある。着替えの時にシャツを後ろ前に着たり、アイスクリームのしずくをズボンに落したりして、巴絵に呆れられている。また、糞尿譚を好み、多少下品な部分もあるのだが、それはガストンを追い掛けて山形に行った時、旅館の女中と山形弁の発音の特徴を話し合っている場面において、糞尿譚を用いたユーモアとして登場する。

「そうか。煙草のピースのことをペーシ、バスのことをバシ、ジドウシャのことはズドウシャ、今日のことはチョウ、シンブンのことはスンブンか」

隆盛は二階で女中を相手に言葉の研究である。

(すると、ウンコのことはエンコ、シッコのことはスココというわけだな) ……彼はすぐ心の中でまた品のよくないことを考える。(p.155)<sup>7)</sup>

そんな隆盛の姿は巴絵の目には何かと情けない兄に映り、見くびっている。隆盛はいつも勝気な巴絵に対し「人生には損することも必要だよ。むだも大事。巴絵にはそれがない」と、諭そうとするが、巴絵はまったく取り合わない。巴絵は世の中の動きを敏感にキャッチし、絶対に損はしない現代風のチャッカリ娘として描かれており、ガストンのことを初めて見たときから「バカじゃないの」と感じる事が最も多い人物である。

豪華客船の出迎えにはカメラマンや新聞記者、吹奏楽団などまで来ており、大変華やかでにぎわっていた。巴絵と隆盛は、思わずこれはナポレオン皇帝の末裔であるガストンの出迎えのためではないかと勘違いしてしまう。しかし、それは同船していた映画女優のためのものだった。一方ガストンは「豆のように裸の電気がポツ、ポツとともって」「丸窓から外の陽の光がほこりをうきさずみさせて流れこんでい」る、船底のキャンパス・ベッドにひとりしょんぼりと座っていた。この対照的な描写も同じ船で旅してきた乗客でありながら、ガストンは悪臭が漂う船底でひとりぼっちで出迎えを待っており、孤独感と寂しさを強調させている。

巴絵もやはり年頃の娘でもあり、ナポレオンの末裔であるガストンに全く無関心であったわけではなかった。書店でナポレオンについて調べたり、母親にたのまれたシーツを買いに行ったりと、戸惑いながらもそれなりにガストンを迎える準備を手伝っていた。ところが、豪華客船の船底という、ナポレオンの末裔らしからぬ場所での初対面に、巴絵の期待が見事に裏切られる。それだけではなく、ガストンを一目見て巴絵は息をのみ(馬……)という言葉しか出てこなかったのである。ほんのわずかではあったが、フランス青年に対する密かなあこがれを抱いた乙女心までが完全に打ち砕かれてしまい、読者も思わず笑ってしまうユーモアの場面である。

7) 遠藤周作(1999)『遠藤周作文学全集第5巻』,新潮社.p.155

本稿において『おバカさん』の引用文は上記の全集の頁数を括弧内に数字で表記した。

巴絵はガストンを見た瞬間、「こみあげてくる笑いを必死でおさえよう」とし、自分の想像とはかけ離れた馬面のフランス人青年を快く受け入れることはできなかった。外見や服装もそうだが、ガストンの動作なれなれしい態度やたどたどしい日本語、大口を開けてニタツと笑う顔、すべてが気に入らなかった。そして「できればこのガストンをどこかに捨ててしまいたかった」と思う態度は、四等の悪臭に対する態度と同じである。つまり、悪臭に眉をひそめ、ハンカチで鼻を覆い、絶対にその臭いを嗅がないようにする巴絵の態度は、ガストンを受け入れられない態度と重なっている。一方、隆盛のほうは悪臭にそれほど反応を示していないのと同様に、ガストンに対しても巴絵のような激しい拒否反応は示していない。むしろガストンを積極的に受け入れる態度を示している。隆盛は「ガスさんは俺の夢」と言い、殺し屋遠藤を追うガストンを追って山形まで行くことを決意する。巴絵は「あたしは間ヌケさんは好きじゃないの。こんなに手数のかかるお客さんはこりごりだわ……」と言うのに対し、隆盛は「おれにはおれのガストン観がある。君は彼をばかにしていた。でもおりゃ、ちがうからね」とガストンへの思いを語っている。この場面では、これまで妹に馬鹿にされ続けてきた隆盛が「シンラツに巴絵の急所をつ」き、巴絵もだまってしまう。

「あの顔、あの服装……そんなことはなんでもないけれど、弱虫よ。臆病だわ。女のよにメソメソしたところもあるじゃないの……あたしたち女の子には、あまり魅力ある男性とは言えないと思うわ」

「なるほど……そうか、いや、そうだろう」

隆盛は二本目の煙草に火をつけてうなずいた。

「どう、お兄さま」巴絵は少し勝ちほこって、「あたしが少しぐらい誤解したって、あたりまえじゃないの」(p.151)

ここでも巴絵はすぐに勝気な態度を再び見せる。しかし隆盛は、そんな巴絵の言葉も「なるほど……そうか、いや、そうだろう」と相手の言葉を飲み込み、受け入れる態度を示している。これが、二人の態度の大きな違いである。結局、隆盛は巴絵には感じられないガストンの不思議な魅力に惹かれている人物として描かれるにとどまらず、ガストンの生き方に共感できる人物として位置づけられている。それは、計算的な巴絵とは違う、どこかたよりない隆盛の魅力でもあるだろう。隆盛はここでなぜ自分がガストンに惹かれるのかを巴絵に語る。

「だがねえ、巴絵、人間はみんなが、美しく強い存在だとは限らないよ。生れつき臆病な人もいる。弱い性格の者もいる。メソメソした心の持主もいる……けれどもね、そんな弱い、臆病な男が自分の弱さを背負いながら、一生懸命美しく生きようとするのは立派だよ」  
「……………」

「おれがガスさんが好きなのはね……彼が意志のつよい、頭のいい男だからじゃないんだよ。弱虫で臆病のくせに……彼は彼なりに頑張ろうとしているからさ。おれには立派な聖人や英雄よりも……はるかにガスさんに親近感を持つね」(p.151)

ここで遠藤が『おバカさん』を執筆する前に書いた朝日新聞掲載の「作者のことば」で述べた内容をもう一度見てみたい。「主人公はぼくが平生からあこがれているような人物です。その主人公を作者はあえて、おバカさん……そう呼びます。(中略)しかし『おバカさん』とはバカという意味ではありません。母親がいたずら小僧のわが子に「オバカサン」、そうささやくときのあのやさしい愛情を作者はこの小説の主人公に抱いているのです。」<sup>8)</sup>という言葉は、遠藤が隆盛の言葉にのせて読者に送るメッセージとなっている。

このように、巴絵と隆盛の四等から漂う便所の臭いに対する態度の違いは、ガストンに対する態度の違いにもあらわれているだけでなく、兄妹のガストン観の違いにも如実にあらわれている。悪臭を嗅いだ人間は、たいてい顔をしかめるのが普通である。しかし隆盛の悪臭に対する態度を見ると、それを拒絶し非難するというよりはそれに同調する態度が見られる。例えば、ガストンが船内で日本人から譲ってもらったふんどしを寿司屋で得意気に「日本のナプキンつけましよう……」と言い無邪気に笑い、店内の客に大笑いされた。そんなガストンの行動に巴絵は恥ずかしさで怒りが爆発した。帰宅の途につく間も巴絵は「ツンと横をむいてガストンにはもちろん、兄の隆盛にも口をきこうとはしな」かった。巴絵はどうしてもガストンを受け入れることが出来ない態度を示す人物として描かれている一方、隆盛は巴絵の態度を見て次のようになだめ、ガストンの立場を理解する人物として描かれている。

(いくら外国人だって—バカ、バカだわ。本当にこの男、バカじゃないかしら)

(中略)

「まあまあ、仕方ねえじゃないか。初めて日本にきたんだもん」

つり革にぶらさがって隆盛がしきりにとりなすが、

「……………」

「巴絵だって外国に行けば同じ失敗をやるかもしれないよ」

「……………」

てんでカキのように口をひらかない。(p.38)

家に着いてからも、隆盛はガストンに「自分の家だと思ってくれたまえ」と歓迎の意を伝えるが、そんな隆盛の態度を見た巴絵は大きく舌打ちをする。このように、二人のガストンに対する態度はまったく対照的である。ガストンが来日するという手紙が舞い込んだ時にも、隆盛は「昔のペンフレンドだった僕を頼って日本にきたんだから一家あげて歓迎すべきだと思う

8) 前掲書7)p.339

んです。日本の家庭を知る。僕らと一緒にミソ汁を飲み、タクアンを食べる、それで結構だと思ふんです」とガストンがナポレオンの末裔だからといって特別なもてなしをしたり、気取ったりせず普段通りの日本の一般家庭を見せよう、ということを強調する態度を示している。ここでもやはり、隆盛の態度はガストンに対して期待を寄せる巴絵やお手伝いさんのマーちゃんの態度とは異なっている。期待が大きい分、裏切られたという思いが強くなるのは当然の事であるが、四等でのガストンに対する巴絵隆盛の態度の違いは、この後に展開する二人のガストンに対する態度と見方の違いの伏線にもなっている。

### 3. 新宿駅裏の小便の臭い

次に悪臭が登場する場面は、隆盛兄妹とガストン、巴絵の同僚である大隈が愚連隊に脅される場面である。隆盛がガストンに夜の東京を案内しよう、という提案だったが、巴絵は「どこに連れていらっしやるの。銀座？」と問い正す。「銀座なんか行かないよ。巴絵などの知らぬ東京の裏の裏」と、隆盛はニヤニヤ笑って答えた。結局、巴絵も一緒に新宿の街にくり出したが、ガストンにとっては初めての街であり「タカモリさん、びっくりごとです」と驚きを隠せない様子であった。ガストンが見たのは「マッチ箱のように並んだ飲屋の灯、香ばしい焼鳥の匂い、客を呼ぶ声、パチンコ屋の音……」など、そこはまさにく人間の臭いのしみこんだ街であった。

そんな新宿の街を歩いていた時、ジャンパー姿の青年がいかかわしい写真をガストンに売り付けようと近寄ってきた。ガストンは状況を掴めず、ただその青年とニコニコと話していたが危険を察知した隆盛は自分は新聞記者であり、ガストンがブラジルの拳闘選手だと咄嗟に嘘をついた。「ノックアウト、デイス、チンピラ」と隆盛がガストンに言うと、ジャンパー姿の青年は何もせずに逃げていった。何とかその場を凌ぎ、逃げ込んだ喫茶店で偶然巴絵の同僚である大隈に出くわす。しかし、その喫茶店にさきほどのジャンパーの青年とその仲間が店の出口に立っていたのであった。店を出ようとした時、愚連隊二人は大隈とガストンの両脇に寄り添った。大隈は愚連隊に脅され、真青な顔をして巴絵の方をひきつった顔をむけたまま歩き出したが、ガストンは、さきほどと同じように青年に微笑をふりまき、何の疑いもなくついて行ってしまった。それを見た巴絵は逃げるのは卑怯だ、と隆盛に言い、勇ましく愚連隊について行った。そして隆盛は「おい、おい……ばかはよしたまえ」と愚連隊を引き留めた。ところが、相手のほうはさらに新しい不良の仲間を連れて来て、隆盛と巴絵の両側にくっついて歩き始めた。この愚連隊に脅される場面に、次のような悪臭の場面が登場する。

この道をもう少し行けば、いわゆる、そこからは愚連隊の巣ともいふべき、いかかわしい飲屋がポツ

ンポツンと並ぶ場所になる。国電の線路が走り、小便の臭いがブンブンする駅の裏の暗い一角だ。隆盛は連中が自分たちをそこに引きずりこもうとしているのに気がついていた……(p.50)

新宿の駅裏は暗く、「小便の臭い」が漂っている。この悪臭は愚連隊のような「町のダニ」がはびこる、闇の世界のイメージである。作中には隆盛たちが愚連隊から逃れ、一息ついた場所は「武蔵野館前」とあるが、これは新宿三丁目に位置する映画館のことである。新宿の歴史を見てみると、江戸時代から宿場として発展した街であり、明治維新以後も色街として存在していた。その後、1945年の戦災により新宿遊郭は焼失し、GHQによる公娼廃止指令により公娼制度が廃止されたが、赤線地帯として生き残った。赤線は1958年に完全施行された買春防止法により廃止されたが、新宿という街が少しずつ変化し始めていた時代であったとも言えよう。

ここで、「新宿」という場所についてガストンのモデルとなったフランス人神父ネラン氏と遠藤に関わるエピソードがあるので見てみたい。

若い頃、私たち二人はよく痛飲し、喧嘩した。喧嘩をしながらも私はこの神父の信仰には脱帽せざるをえなかったものだ。なぜなら彼の信仰は生きた(傍点そのまま)信仰だからである。(中略)「あなたもいつか、新宿の雑踏の中にキリストを書かないかねえ」とむかし酔っぱらった時、ネラン神父は私に呟いた。

きよらかな場所、澄んだ世界ではなく、最も人間的によごれた、人間の臭いのしみこんだ新宿の迷路や隘路のなかにキリストを歩かせるような小説を書いてくれ、と彼は私に吹きこんだのである。

その言葉はそれから長い年月がたっても私の頭にこびりついていた。9)

遠藤は奇跡を起こすような強いイエスに着目するよりも、弟子に裏切られながらも最期まで愛を貫いたイエスに惹かれ、優しい母のような神、日本人に合う基督教を模索した作家であった。特別な場所や清らかな場所ではない、我々が暮らす日常の中に自分のイエスを描こうという作家の姿勢が多くの作品に反映している。つまりそれはキリストなどをまったく意識しない日本人たちを対象にし、日常の世界の中に遠藤が理想とするキリストの象徴としてガストンを登場させているのである。また、遠藤は1966年に収録された「『沈黙』について」という『沈黙』が発表された直後の講演<sup>10)</sup>で、自身がどういうものを描こうとしているのか、次のように語っている。

9) G・ネラン(1988)『おバカさんの自叙伝半分』,講談社,p3

10) CD版遠藤周作講演選集(第1巻「『沈黙』について」),アートデイズ

この講演会は遠藤が43歳の時、『沈黙』が発表された直後に行なわれたものである。長崎で一枚の踏み絵を見て、そこに残された足指の跡と摩滅した哀しげなイエスの表情から『沈黙』の構想を練り始め、作品を書き上げるまでの道のりを告白している。



人生もそうだと思うんです。僕は人生っていうのは魅力あるもの、美しいものじゃないから我々が捨ててはいけない、と思うんだ。(中略)私が聖書の中で一番好きなのはですね、キリストがですね、その魅力のあるもの、美しい者を追っかけてたってところが1ページもないからですよ。汚ないものとか色褪せたものしかさあ、そのう……探していなかった。例えば長血をわずらう女とか、娼婦とか……つまりそういう社会から見るとですね、最も卑しめられていたようなものしか、追っていかなかった。

このように遠藤は、自分の作品にも社会から疎外された人間たちに焦点をあて、描いていることを明らかにしている。この観点から見ると『おバカさん』に登場する人物も社会から疎外され、日陰者として生きる人物が多く登場していることが指摘できる。新宿で隆盛兄妹を脅した愚連隊、ガストンが渋谷で出会った娼婦たち、その娼婦が紹介してくれた元校長だった占師の川井蝸亭、その占師の教え子だった殺し屋遠藤、そして殺し屋遠藤の兄に無実の罪を着せた金井と小林、山谷で暮らす人々など実に登場人物の半分以上がこのような人々である。

新宿の駅裏は、前述したネラン氏が語るように「人間の臭いのしみこんだ場所」と言える。実際にネラン氏は1980年から、新宿の歌舞伎町でスナックバー「エポペ(楽しい冒険)」でシェーカーを振りながら、サラリーマンたちの本音に触れるようになった。こんなネラン氏の活動は、まさに遠藤が求めた日本人に合った基督教の姿だったのではなかろうか。ネラン氏の著作『おバカさんの自叙伝半分』の中に収められている遠藤の「わが小説のモデルについて」の中に「日本人は酔わないと、本音をださないからねえ」というネラン氏のつぶやきを受け、「その本音の声がどんなに悲しく、よごれ、汚なくても、本音のなかにこそキリストが入りこむことを神父は教えているのである」と遠藤は記している。

そんな新宿の街で隆盛たちは愚連隊に絡まれた。巴絵は道行く人々に助けを求めたが、誰一人として助けてくれる者はいなかった。みんな自分の身を守ることに必死なのである。二人の学生に「おねがい……助けて……あたしたち変な男にかこまれてるんです」と叫んでも、二人の顔には「ありありと恐怖の色がうか」び、「足がすくんだように棒立ちになってい」たのである。こんな大学生の姿は次のように描写されている。

インテリの卵というのはこういう場合、頼りにならない。自分たちまでがまきぞえをくっては大変と素早く計算した学生たちは、顔をこわばらせたまま、コソコソと足早に去って行った。

「だらしねえヤロウよ」

愚連隊たちがちょっと、気をゆるめたこの瞬間だった。(p.51)

いくら知識に富んでいても、それを実践できなければ何の意味も持たない、ということを遠藤は訴えたかったに違いない。大学生たちの姿やインテリの姿は、大隈と出会った喫茶店

「クイヨン」に集まる若者たちの描写にもあらわれている。店内は「水族館のように暗」く、「昼でさえわざわざ厚いカーテンをしめて、金色の壁に淡くともったランプの光」のせいで、「若い客たちの顔を水槽の中の魚のように青白く浮き上が」って見えるのであった。ここでは、隆盛が客の様子をすべて魚で表現しているところにユーモアがある。文学青年は、苦しそうな表情をし、その目は「ボラ目」のようであり、甘いシャンソンにうっとりしているムード娘は「十匹一円のメダカ」、そんなメダカを小声でひそひそと口説いているいやらしい中年男は「スケソウダラ」のようである。

魚は瞬きをしない。つまり表情がない。そんな「クイヨン」の客たちを隆盛は冷めた目で観察している。隆盛自身、東京の喫茶店の高尚さと「詩人の魂」などを聞かされたため息をつくのは自分の柄ではないと自覚しており、こんな場所は「気恥ずかしくて苦手」で、できれば「近所の飲屋でオダをあげた」いと思っていたのである。隆盛は、こんな気取った店は自分の性に合わず、パリ・シャン族に出会えば逃げ出してしまうタイプである。なぜなら、パリ・シャン族は、自分の国や自分が住む町をパリと比較し、軽蔑するという特徴があるからである。特に「クイヨン」は店内にシャンソンが流れ、フランス情緒、パリムードを売りにしている店であったため、隆盛は余計に拒否反応を示している。巴絵の同僚である大隈の発言に対する隆盛の態度からもそれが窺える。

第一、彼にはこんな理屈を並べることが生来、苦手なのである。ただなぜかしらぬが、なにもワザワザ、外国人や巴絵のような女の子の前で自分の国の悪口を強調することはないと思う。同じ同胞を軽蔑することはないと思う。話をきいていると、おしりのあたりにジンマシンが発生しそうな気分になるのである。(p.48)

遠藤の著作、とくにユーモア小説やエッセイなどには「ジンマシンが出そうになる」という表現がたくさん登場する。これは気取った雰囲気に対する拒否反応として描かれている。この反応は女性にはなく、男性特有の反応として表わされているのが特徴である。おそらく、遠藤自身も自分のイメージが固定されるのを嫌がった作家であったし、自分自身のふざけた部分もさらけ出したいという欲求の解消の一つの場として、ユーモア作品やエッセイを書いていたとも言えよう。『おバカさん』ではぐうたらな隆盛を通して、ガストンの魅力について気取らぬ態度で語らせている。

巴絵が助けを求めても、自分の身を守るために手を貸そうとしない大学生も、やはりインテリではあるが他人のために自分を犠牲にするような馬鹿なことは絶対にしない人間たちである。大学生のみならず、愚連隊に殴られたガストンを遠目に取り巻いていた見物人も誰一人としてガストンを助けようとはしなかった。この場面に登場する群衆の心理は、誰にでもある心の闇の部分を表出し、占師の川井蝸亭を通して現代社会の問題点を吐露させている。占師の川井はガストンには聞き取りにくい日本語を話し、ガストンも曖昧にうなずくしかなく、

会話が噛み合わない二人のやりとりがユーモラスに描かれている。自己紹介で「わたしの名……ガス」と言ったガストンに占師は「ガス？ガスと申すはここからでるガスですか」と自分の尻を指さした。やはりここでもユーモアの素材として糞尿譚が登場している。

しかし、ユーモラスな場面の後、現代の日本が抱える社会問題について、占師はガストンに「イワシ臭いいきをはきかけながら」悲憤慷慨しながら訴える。

「まだ人間を信じとるのは下における人間じゃ。あんたを昨日送ってきた女たちも、体を売ったり人のものを盗ったりはするが、根はバカでもお人好しで、情のある女子ばかり。真心というものを持つります。真心というものを持つとらんのは、あんた、この日本で……政治家とインテリと呼ばれる人たちですたい」(p.75)

外国人のガストンにとっては、占師の言葉は難しすぎて理解しがたいため、意味が伝わりにくいのが、それでも懸命に耳を傾けるガストンの姿はユーモラスである。それに加えて、占師は「イワシくさいいき」をかけるのである。臭いのする口から出る言葉にこそ、真実を語らせているのは、『沈黙』のキチジローの「イワシの臭いがする息」と共通していると言える。

また、新宿という「人間の臭いがしみこんだ場所」で繰り広げられた愚連隊とガストンの事件は、人間の心の闇を表出させるための装置である。世間では大学生やインテリなどと学がある、とてもはやされているような立場の人間たちも、一方的に無抵抗にいじめられているガストンを助ける者が一人もいなかったというのは、「自分は損はしたくない」という人間の自己防衛の心理である。しかも、社会でうまくやっていくためには、それを「素早く計算」しなければならないのである。あくまでも自分の損得を優先し、その行動には相手を思いやる真心のかけらも見当たらない。つまり、相手の痛みや苦しみに鈍感な人間たちの行動なのである。

しかし、その対極にいる人物は言うまでもなくガストンである。ガストンは皆から恐れられている殺し屋遠藤のあとを最後まで追っていく。巴絵にも無謀なことはしないように止められるが、その決心は固かった。もちろん、ガストンに恐怖心が無いわけではない。むしろ臆病で、怖さのために涙まで流すのである。新宿で愚連隊に容赦無く殴られたガストンは涙を流しながら「なぜ、わたし……いじめます？」「みんな、友だち……」と訴えかけた。ガストンは三人に対して「友だち」という言葉を使っている。まず「ペン・フレンド」であった隆盛を頼って来日した。そして皆に邪魔者扱いされていた野良犬に自分と同じナポレオンという名を付け、「今日からこのイヌさん、みなさんのお友だち。わたしと同じお友だち」と言い、東京の街を旅する相棒となった。そして一番重要なのは、殺し屋遠藤である。「わたしとあなたトモダチ」「遠藤さん、一人ぼっち。一人ぼっちだからトモダチいますね」とガストンは絶対に遠藤を見捨てない固い意志を伝える。それは、はるばる海を渡って日本までやって来たガストンの「どんな人間も信じよう」という自分に課した使命であった。そんなガストンは、

愚連隊に殴られても決して抵抗しなかった。その様子を見ていた「日本人たち」を遠藤は次のように描いている。

見物していた日本人たちは顔をそむけて散らばりはじめた。上着を肩にひっかけていた愚連隊の兄貴もプイと……うしろをむくと歩きだした。なぜかわからぬが、だれもが後味の悪い屈辱感に心をみだされていた。なぜかわからぬが、だれもが寂しさとも悔いともつかぬものに胸をしめつけられていた。(p.53)

ここで遠藤は群衆をあえて「日本人たち」と表現したように考えられる。殴られているガストンはフランス人であり、遠藤が描くキリストのイメージと重なる人物である。キリストを意識しない「日本人たち」が果たしてこの状況を見て何を感じ、どう行動するのかを客観的な観察眼でとらえた描写である。ガストンの言葉に「日本人たち」が「後味の悪い屈辱感」と「寂しさとも悔いともつかぬものに胸をしめつけられて」いるのは、ガストンに対する憐憫の情のあらわれであろう。結局、何もできなかった見物人たちは散り散りにその場を立ち去るが、「なぜかわからぬ」心苦しきは感じているのである。これが遠藤の作品によく登場する「痕跡」である。ガストンが日本で出会った人々、みんなに少なからず「痕跡」を残して去って行くのである。

この新宿での事件の始りの場面に「小便の臭い」が漂う場所に設定したのは、作家の意図が窺える。それは「小便」という排泄行為は、人間であれば誰もが行なう生理的現象であり、それと同様に見物人たちの誰もが自分にはトラブルに巻き込まれたくない、という自己防衛の心理を持ち合わせている、という事と重ねることができるからである。つまり、遠藤がユーモアの素材として悪臭を用いながらも、人間の排泄行為が万人に共通する行為であることと同様に、人間ならば誰でも持ち合わせている心の闇を描いたと見ることができよう。

#### 4. 山谷のドヤの便所の臭い

ガストンは、隆盛の家を出て東京の街をさまよっていた。ようやくホテル街を見つけ、その親切心にガストンは感動した。なぜなら、宿泊料が一目瞭然だったからである。ガストンはそこがラブホテルということを知らずに、連れの犬一匹と一人で泊まりたいと言った。すると女中は怪訝な顔をし、部屋に案内した。トイレに行くためにおそろおそろ廊下に出たとき、ある娼婦に「助けてよ、あんた……」と懇願され、事情がのみこめないまま逃がしてやった。しかし、その娼婦と一緒にいた男性客が「小便しよったんや、あのパンスケめが……」と大

声で女中に文句を言っているのを聞いたガストンは、幼い頃に自分も寝小便をして恥ずかしかつた経験を思い出し、思わず「ショウベン、あなたもしますネ。ショウベンしたこと怒ること、あなた、まちがい」とマジメな顔で娼婦を弁護し始めたのである。

しかし男が言っていた「小便」とは、ガストンが知っていた辞書的な意味での「小便」ではなかった。男が言った「小便」とは娼婦が金だけを巻き上げて、便所に行くと言った嘘を言って逃げてしまうという意味の隠語であった。ここでガストンが助けてやった娼婦と、また偶然出会うことになるのだが、さきほどの宿からは追い出されてしまったガストンは行くあてもなく困っていた。するとさっきの娼婦から知り合いの占師の家を紹介され、世話になるようになった。

その占師は以前は小学校の校長を務めていたが、彼の元教え子であり、今は殺し屋となった遠藤とガストンは出会う。そして殺し屋遠藤に半ば拉致された形で、山谷の宿に泊まることになる。山谷は警察の手も回らないほど、人間が人間らしく暮らせないような劣悪な環境の場所であった。山谷の町は、日雇い労働者が集まり、東京の中でももっとも暗黒街と呼ばれる場所であった。淫売婦があふれ、売春や性欲のはけ口として人々が集まる町である。これらの宿は「ドヤ」と呼ばれ、警察も殺人などが無い限りは目をつぶっている状況であり、夫婦合意のもと、妻が売春をして生計を立てているような家族もいる。その日一日を暮らすことだけでも精一杯な人間たちが集まっている山谷のドヤで、ガストンも悪夢の中にあるような気持ちになるのであった。

この山谷の町も悪臭に満ちている描写となっているが、新宿の駅裏の臭いよりもさらに悪臭が漂う場所として描かれている。

見まわすとどれもこれも旅館ばかりだった。たがあの渋谷の旅館街とはうって違って、どの家も掘立小屋以上に不潔でみすばらしく、やぶれたガラス窓には—

一泊、四十円とペンキで書いてあるのである。(中略)

遠藤につれられてガストンがせまい階段をのぼると、あの獣の体臭のようなにおいが廊下にも部屋の中にも充満していた。赤茶けた畳、落書をした壁、すみに重ねた蒲団、それ以外に三畳のこの牢獄のような部屋には何もなかった。蝸亭老人の寝ぐらのほうがまだ雑然とはしていたが、もっと人間味があつた。(p.89)

占師の部屋にあった蒲団は「ごみくさい毛布」であり、ノミか何かがいるのかむずかしくはいまわっていた。次の日には占師から占いの目的は人をだますのではなく、迷っている人々に元気を与え、勇気づけることだという話を聞く。実際に占師の周りには近所に住む女中たちや、ガストンを連れてきた娼婦たちなど人間らしい交わりが見られた。しかし、山谷の宿にはそんな人間的な交わりを感じられる光景は見られなかった。

その夜、ガストンはなかなか寝付けずに蒲団から抜け出したところ、殺し屋遠藤に「ぼくア、あんたの足音をここできいているから、足音をたてて行きたまえ。出口の方向に行けば

ちらにはすぐわかるんだから」と念を押されてしまう。殺し屋の言う通り、廊下に出ると便所の臭気が漂っていたが、ガストンは思わず恐怖で涙を拭っていた。ちょうどその時、ガストンが渋谷のホテルで逃がしてやった娼婦に偶然再会するが、この場面でもやはり便所の臭気が描写されている。

「シッ、あたしだよ。渋谷で会ったろ」

声にはききおぼえがあった。そう—あの小便をした女。自分におでんを恵んでくれた女の声だった。

「オウ、あなた」

「静かにするんだよ」

「あなた、ここでもションベンか」

「静かになれば……なぜ先生のとこ、出たんだい。昨晚、廊下でチラッと見てさ、驚いたよ、お前さん」(p.93)

娼婦もガストンも偶然の再会に驚いたが、二人の再会の場所はまたしても便所の臭いが漂う場所であった。そしてガストンは「あなた、ここでもションベンか」と、今回は隠語の意味をきちんと理解して話しかけたガストンの言葉にユーモアを感じる場面である。しかし、娼婦はガストンに一刻も早くここから逃げるように忠告する。

ところが、この二人の会話を遠藤は背後で静かに聞いていた。殺し屋遠藤に気づいた娼婦は、恐怖で顔がゆがんでいた。なぜなら、娼婦は血も涙もない殺し屋だと知っていたからである。殺し屋遠藤は娼婦と話していたガストンを便所に行くように促し、その間に娼婦をズボンのベルトで何度も叩いた。娼婦は悲鳴をあげ、そのうちうめき声に変わり、顔からは血が流れ出ていた。ガストンは殺し屋遠藤に、なぜそんなことをするのかと問い詰める。

「便所は……すませてきたかね」と静かにたずねた。

「あなた……」ガストンは叫んだ。「その女のかた、しんせつですのに、あなた……なぜたたくことします」

「……………」(p.94)

この場面は、この先ガストンが殺し屋遠藤と関わっていく上で大変重要な場面である。山谷を舞台に、家畜小屋のような悪臭が漂い、掘立小屋以上にみすばらしい空間に暮らす人間たち、そして人間を信じられなくなったという殺し屋遠藤の深い悲しみが悪臭が漂う便所の場面においてより鮮烈に描かれている。作家は「人間の暗い部分、悲しい部分、よごれた部分」をさらに強調させるために、便所の臭気が漂うドヤで娼婦が殺し屋に殴られるという悲惨な場面を描きながら、人間の残酷さと心の闇を表現したと言える。

## 5. おわりに

以上、『おバカさん』にあらわれる悪臭がどのような場面に登場し、そのユーモア性とどのような意図でそれを作品中に描いているかを見てきた。『おバカさん』の中にはいろいろなユーモアの要素が含まれているが、便所の悪臭や、小便の臭い、糞尿譚が多く登場する。まず、ガストンが乗ってきたという豪華客船の四等から漂ってくる便所の臭いに対する隆盛と巴絵の態度の違いがユーモラスに描かれている。巴絵は敏感に反応し絶対にその臭いを嗅がないようにハンカチで鼻をおさえる。一方隆盛はその臭いで尿意を催す。この二人の態度の違いは、その後のガストンに対する態度や見方の伏線ともなっている。また、豪華客船の華やかな外見からは想像できないが、四等がある船底は暗く、さびしくよごれ、便所の臭いが漂っている。これと同じように、占師の川井蝸亭はガストンに政治家やインテリと呼ばれるような社会的地位がある人間たちは、外見は立派に見えても他人に対するやさしさ、真心がないと吐露する。占師の口からは、イワシの臭いがしていたが、そんな口臭がする口から読者に伝えたいメッセージを発信させており、汚れた部分にこそ真実を見い出そうとする作家の態度が垣間見える。

そして新宿の駅裏から漂う小便の臭いは、他人に無関心な人間の姿と重なり合い、自己防衛だけを優先させる人間の心の闇のメタファーとして描かれている。最も強烈な悪臭は、山谷のドヤの便所から漂う臭いである。そこは便所からだけでなく、廊下にも動物のような臭気がこもっていた。その便所の臭いが漂う場所で、殺し屋遠藤はつかまえた娼婦を無感情にベルトで何度もたたいた。殴られた娼婦は恐怖におののき、ガストンはなぜそんなことをするのか問い正すが、遠藤は無実の兄が殺され、その復讐のためだけに生きる人間であり、人間を信じない、信じなくさせられたと吐き捨てる。山谷の便所は、渋谷で会った娼婦との再会の場所としても描かれている。そして「あなた、ここでもシヨンベンか」というガストンの言葉がユーモラスである。

遠藤が作品中に登場させる便所の悪臭のモチーフは、作品にユーモアをもたせる一方で登場人物の人物像の心理をよりはっきりと浮かび上がらせる効果を与えている。便所の臭いとは、つまり人間の排泄物から出る臭いである。それは、どんな人間も生理的な排泄を避けることはできないように、人間ならば誰にでもある心の闇、つまり「人間の暗い部分、悲しい部分、よごれた部分」をより効果的に描くための装置としても使われている。

## 【参考文献】

- 遠藤周作(1964) 「ユーモア文学のすすめ」 『朝日新聞』, 7月7日掲載
- 遠藤周作(1972) 『ぐうたら人間学』, 講談社. p.46
- 遠藤周作(1974) 『日本人を語る』, 小学館. p.138~143
- 遠藤周作(1975) 『第二ユーモア小説』, 講談社文庫. p.331
- 遠藤周作(1980) 『こっそり、遠藤周作。』, 面白半分1月臨時増刊号. p.145
- 遠藤周作(1999) 『遠藤周作文学全集第5巻』, 新潮社. p.38,48,50,51,53,75,89,93,94,151, 155
- 遠藤周作(2000) 『遠藤周作文学全集第12巻』, 新潮社. pp.409~410
- 遠藤周作(2002) 「CD版遠藤周作講演選集(第1巻「『沈黙』について)」, アートデイズ
- 小嶋洋輔(2007) 「遠藤周作「中間小説論」—書き分けを行なう作家—」, 千葉大学人文研究no.36. p313
- G・ネラン(1988) 『おバカさんの自叙伝半分』, 講談社. p.3



## 要 旨

遠藤周作の『おバカさん』は1959年3月26日から8月15日まで、朝日新聞夕刊に掲載された遠藤最初のユーモア小説である。これまでの遠藤の文学研究においては純文学を中心に遠藤が追求した日本人に合うキリスト像、母なる神、同伴者イエスを論じるものが主流であった。

『おバカさん』の研究も遠藤が理想とするキリスト像としてのガストンの研究や殺し屋遠藤の心理的变化についての論文がある。

本論では、遠藤がユーモアの素材として取り入れている悪臭や糞尿に関する生理的現象に関するものが多いという点に注目し、それがどのように作品に描かれているのか、そしてそれがどんな意味をあらわしているのかを探ってみた。

まず、便所の臭いや小便の臭いがする場所は、登場人物の人物像をより浮き上がらせるための装置として働いている。そして、悪臭や便所の臭いは、作品にユーモア性を付加するのみならず、人間が持っている心の闇を暗示する役目を果たしている。人間が生理的排泄を避けることができないように「人間の暗い部分、悲しい部分、よごれた部分」をより効果的にあらわす描写として使われている。それ以外にも、豪華客船の四等船室、新宿、山谷それぞれの場所の特徴を示すのにも臭いの描写が巧みに盛り込まれている。便所の臭いという共通点はあるものの、やはりその臭いが漂う場所とそこに登場する人物の心理描写と密接に関連していると見ることができる。

キーワード：悪臭、おバカさん、遠藤周作、ユーモア小説、笑い、留学体験、  
人物描写、ネラン神父、人間の心の闇

투 고 : 2014. 11. 30  
1차 심사 : 2014. 12. 13  
2차 심사 : 2015. 1. 3